

4 「葉隱聞書」をめぐる人々

「葉隱聞書」は、口述者である山本常朝、編さん者である田代陣基だけによって成立したものではありません。祖父中野清明、父山本重澄、甥山本常治、常朝が教えを受けた石田一鼎、常朝が影響を受けた湛然和尚、さらに常朝とともに隠棲した了為和尚、湛然和尚と親交があり、常朝が敬愛した深江信渙等の影響がみられます。

山本常朝、田代陣基、石田一鼎、湛然和尚は「葉隱四哲」ともよばれます。

通天寺（佐賀市大和町松瀬）所蔵の肖像画（作者・制作年不詳）は擦筆による木炭画です。



湛然和尚木像 [通天寺所蔵]



了為和尚木像 [静元寺所蔵]



深江信渙木像 [通天寺所蔵]



鍋島茂貞肖像画

太田鍋島家の当主である鍋島茂貞は、鍋島家家老であり、常朝の父重澄の寄親（上司）でしたが、島原の乱において26歳で戦死しました。重澄も負傷しましたが、茂貞戦死にあたって、初代藩主勝茂の重澄への言葉が「山本神右衛門重澄年譜」に残されています。



石田一鼎自讃画（部分）



「葉隱四哲」肖像画(擦筆)[通天寺所蔵]

5 「葉隱聞書」の構成

「葉隱聞書」は、全十一巻からなり、「夜陰の閑談」という序文ではじめます。聞書第一・第二は、陣基が常朝から直接聞いた教訓や実際にあった話、聞書第三は佐賀藩祖直茂に関すること、聞書第四は主に初代藩主勝茂に関すること、聞書第五は主に二代藩主光茂、三代藩主綱茂に関すること、聞書第六は「御国舌來の事」、聞書第七・第八・第九は「武勇奉公方、御国諸士の褒貶」、聞書第十は「他家の噂並びに由緒等」、聞書第十一は「前十冊の内に載せざる事その外」となっています。

つまり、常朝自身の話をまとめた聞書第一・第二と常朝の話をもとに陣基が独自に編さんした聞書第三以降に大きく分かれています。